



ドイツからの
環境・エネルギー
先端レポート

環境教育 ～明日への投資～

● 松田 雅央(まつだまさひろ)
1966年盛岡生まれ。カールスルーエ市在住ジャーナリスト。
1992年東京都立大学工学研究科大学院修了、1995年渡独。
趣味はサイクリング。自然豊かな農村地帯を走る爽快感が好き。
<http://www.umwelt.jp/>

子供達の興味をかき立てる工夫

ある秋晴れの金曜午後。フライブルク市郊外の環境教育施設「エコステーション」は野外学習を楽しむ子供たちの熱気に溢れていました。池に棲む生物の観察、野鳥の巣箱作り、焚き火でのパン焼き、収穫した野菜を使ったサラダ作り…。このエコステーションは環境保全団体BUNDが運営し、地域の子供だけでなく成人も含めた環境教育の拠点として活用されています。この日はターナ・ギューナー環境相の視察があったため、職員は少々緊張気味でした。

環境教育の活発なドイツですが、意外にも学校のカリキュラムに「環境授業」といったものは見当たりません。ドイツは連邦制のため状況は州によって異なりますが、この州では総合学習の時間を利用することが多いようです。

典型的なものとして、例えば「畑・花壇・各種ビオトープ*を組み合わせた学校の庭」の総合学習が挙げられます。ここでは、植物・昆虫の観察や野菜作り(理科・算数)、絵日記(作文・図工)、ゴミ処理(社会科)、調理(家庭科)のように、アイデアに満ちた多彩な学習が展開されています。「環境授業」という科目を作り、環境だけを切り出して近視眼的に扱うのではなく、あくまで日常生活と関連付けながら子供達の興味をかき立てる工夫がなされています。



州の環境大臣(中央)がエコステーションを視察

環境教育は、社会的な投資

環境教育の質は教員の能力とやる気に大きく左右されるため、そういった教員を養成するセミナーや教本の整備が重要です。加えて、学校の庭がない小学校にはエコステーションのような施設がその機会を提供するなど、市民団体の協力体制が分厚いのもドイツの特徴でしょう。

ユネスコの定義(1977年)によれば、環境教育の目的は「環境に関する一意識の育成、一知識の習得、一やる気の刺激、一能力の開発、一共同作業の訓練」に集約されます。現代の視点を加味して環境教育を定義すれば「持続可能な社会発展を担う市民を育てるための社会的な投資」となりそうです。

*ビオトープ: Biotop、ギリシャ語の「Bios(生命)」と「Topos(場所、空間)」を組み合わせたドイツの造語。日本語に訳せば「生き物の棲むところ」、あるいは「地域の自然環境に適した動植物が、特定の生態系を保つ空間」となる。

取材協力: フライブルク・エコステーション(Ökostation Freiburg)
バーデン・ヴュルテンベルク州環境省(Umweltministerium Baden-Württemberg)

編集後記

今号より編集後記を担当します吉田と申します。今号でとりあげたウォーター展の取材では体温計を体験しました。外見は学校の保健室にあった体重計のようですが、体の中の水分量を測定できるものです。私の結果は49%と人間の平均値といわれる65%より低めの結果でした。

水分は体温調節に重要な役割を果たしています、私もこの結果をふまえて、体内の水分について勉強してみようと思います。さて、次号では環境展示会「エコプロダクツ2007」の模様をレポートしたいと思います。どうぞお楽しみに!

吉田

▶ 写真家河野裕昭氏が撮影した水車の写真をお届けします

表紙は福岡県朝倉町の「三連水車」。筑後川の流れを受ける堀川にかかり、朝倉町の農地を今も潤している。貴重な文化遺産として国指定史跡にもなっています。



ドイチェ・アセット・マネジメント株式会社
Deutsche Asset Management
A Member of the Deutsche Bank Group



投資信託営業部
☎ 0120-442-785
(受付時間:営業日の午前9時から午後5時)
<http://www.damj.co.jp>